

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520188

研究課題名（和文） 中世歌謡と絵画および意匠との関わりをめぐる総合的研究

研究課題名（英文） A Study of Relationship between Japanese Ballads in Middle Ages and Design

研究代表者

植木 朝子 (UEKI TOMOKO)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：10272741

研究成果の概要（和文）：中世前期の今様、および中世後期の小歌を取り上げて、同時代の絵画・意匠と比較検討し、それぞれの歌謡の持つ特質を明らかにした。また、意匠・文様の背景にある歌謡の詞章を丁寧に読み解くことで、当該の意匠・文様にどのような意味が込められているのかを考察した。

研究成果の概要（英文）：I have compared the songs and ballads in middle ages with the pictures and design in the same ages, make the feature of the songs and ballads clear. I think about the meaning of the pictures and design which have the songs and ballads in the background.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：今様、中世小歌、梁塵秘抄、閑吟集

1. 研究開始当初の背景

日本文学史において、中世は芸能の時代とも称され、能・狂言をはじめとして多くの芸能が花開いた時期である。茶道、華道、香道、水墨画、能・狂言など、それぞれの芸能の分野において詳細な研究が積み重ねられているが、分野の異なる芸能の相互の交流についてはいまだ十分な検討がなされているとは言い難い状態であった。本研究のテーマは主に美術史の分野で取り上げられてきたが、従来の美術史の研究においては、歌謡の詞章を誤読し、その結果、絵画や意匠に対して誤った意味づけを行っている場合があった。たと

えば、金箔で右から左へ大きな橋をかけ渡し、柳と水車をあしらった屏風絵「柳橋水車図」の定型の成立には、『閑吟集』所収の、「宇治の川瀬の水車 何とうき世をめぐるらう」という室町小歌や、さかのぼっては、「をかしく舞ふものは 巫 小楯葉 車の筒とかや 平等院なる水車 囃せば舞ひ出づる 蝸牛」という『梁塵秘抄』今様が関わっていることが指摘されてきた。従来の美術史の研究においては、多くの場合、「水車」はこれらの歌謡が示す通り無常の象徴であり、「柳橋水車図」は、暗い憂き世を孤独にめぐり続ける水車に対して、橋の向こう側には明るい

浄土があることを描いているといった解釈がなされてきた。しかし『閑吟集』の「うき世」は「憂き世」から「浮き世」への転換期にあたる用例で、「何せうぞ くすんで この世は夢よ ただ狂へ」というような、この世を夢と見て、だから真面目くさっていないで、遊び狂おうと歌う小歌を傍らに置くと、当該小歌はこの世を無常と見る厭世観に覆われた一首とばかりは言えない。今様にいたっては、水車を「をかしく舞ふ」と捉えているのだから、くるくるとめぐる水車の動きに興じる明るい趣に満ちている。従ってこれらの歌謡を根拠に、「柳橋水車図」を厭離穢土欣求浄土につながる無常観と結びつけて解釈することは難しいであろう。このように、従来の美術史研究においては歌謡の言葉の解釈がなごりなまま、絵画や意匠の意味づけがなされてきた場合があった。

2. 研究の目的

本研究においては、中世歌謡を中心に据えて、関連する様々な芸能のうちでも、特に絵画・意匠を取り上げ比較検討することによって、歌謡の読解を深めてその特質を明らかにし、また、絵画に対してもその典拠となる歌謡を厳密に解釈することから、絵画の新たな読み解きを提示することを目的とした。

3. 研究の方法

出来るだけ多くの絵画資料の閲覧（展覧会の観覧を含む）、収集、分析を行い、歌謡の詞章と付き合わせた上で、相互の関わりを考察した。中世前期の歌謡である今様（1）と、中世後期の歌謡である室町小歌（2）を対象とし、以下の諸点について検討した。

（1）①絵画と今様の取り上げる法華経の場面、動物表現にはどのような共通点、相違点があるのか。②絵画との相違点から導き出せる、今様の特質とはどのようなものか。

（2）①小歌の詞章と関わりを見出せる意匠・文様にはどのようなものがあるのか。②小歌の詞章の解釈から当該の意匠・文様にはどのような意味が込められているといえるのか。

（1）（2）を踏まえた上で能や狂言も考慮に入れ、中世前期・後期を通した絵画と歌謡との関わり的一端を明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

初年度は、中世前期の今様を対象として、特に法華経二十八品歌と経旨絵の比較対象を行った。化城喻品から普賢菩薩勧発品にいたるまでの二十二品について、法華経本文と今様、経旨絵、和歌を比較し、そこから導き出される今様の特色を明らかにした。たとえば、譬喩品において、絵画化される内容は大

きく二つあり、一つは火宅の比喻、もう一つは人間の受ける諸苦悩であるが、今様は前者のみを取り上げ、後者には一切触れない。苦悩の面を取り上げず、火宅の譬喩から仏乗を讃え、舍利弗の成仏を歌うなど積極的で明るい讃嘆の色合いが濃いのである。あるいは、授記品において、今様には切り取られなかった場面で絵画化されているのは、大王饗宴の図であるが、これは経に、授記を得た喜びと安心を、四大声聞が「飢えたる国より来りて、忽ちに大王の膳に遇えるに、心、猶、疑懼を懐いて、未だ敢えて即便ちには食せず。若しまた王の教を得れば、然る後、乃ち敢えて食するが如く、我等も、亦、かくの如し」と譬えたことによっている。多くの食物の並ぶ豪華なテーブルと、その前でかしまっている人の姿は、絵画化されるのにふさわしい、視覚的印象の強い場面であるが、飢えているにもかかわらず、疑いと懼れを抱いて食事をとらない時と、王の教えを受けて食し、安楽になった時を対比し、後者に授記を得た喜びを重ねるというやや複雑な譬え方になっているため、今様には取り上げられなかったものと思われる。一方で、絵画から影響を受けたと思われる事例もある。たとえば、提婆品の今様において、釈迦に法華経を教えた阿私仙人の住まいは「洞」と表現されるが、「洞」の語は経典や仏教説話などには見られない。しかし経旨絵においては、阿私仙人は洞の中に座し、手に法華経とおぼしき紙片、あるいは巻物を持った姿で描かれることが多い（厳島神社蔵紺紙金字法華経巻五見返、藤田美術館蔵仏功德蒔絵経箱、個人蔵金字法華経巻五見返 [平泉中尊寺に伝来]、個人蔵法華経巻五見返 [伝来不詳] など）。阿私仙人は山中にいたので、洞に住んでいるのは当然予想されることであり、当然すぎるためかあまり注意されてこなかったが、このような具体的視覚的事例は、「洞」の語が今様の中に歌い込まれる背景として、視野に入れておいてよいものと考えられる。この研究成果は、中世歌謡研究会での梁塵秘抄注釈執筆担当部分に取り入れている（『梁塵 研究と資料』、第26号、104頁-135頁、2009年）。

また、今様起源譚との関わりから、聖徳太子絵伝の調査を行い、火星の精の描かれ方について考察した。火星の精は、『郢曲相承次第』や『今様の濫觴』といった、早い時期の今様起源譚においては、赤い衣を着た人の姿で描かれるのに対し、中世聖徳太子伝においては肌の赤い鬼として描かれ、人間離れした恐ろしさが強調される。一方、聖徳太子絵伝においては、恐ろしい鬼形と優美な天人形の

二様に表されていて、その割合は鬼形がやや多い程度である。絵画の世界では、物語に忠実な鬼の姿の他に、美しい天人の姿という新たな展開が見出されるのである。この研究成果の一部は論文「今様起源譚の展開—中世聖徳太子伝から—」(『同志社国文学』、第70号、36頁—45頁、2009年)にふれた。

絵画の動物表現と中世芸能の関わりとしては、特に「梟」と「鳥」に注目して調査を行った。中世後期の芸能である狂言の《梟》という作品においては、「梟」の霊を「鳥」の印で退治するという言説が見られるが、これまでなぜ梟退治に「鳥」の印が用いられるのかは明らかにされていない。しかし、周辺の文学作品を調査すると、梟と鳥とは、天敵同士であるという事実により、仏典や昔話の中でも、不仲なものとして語られてきたことが確認できる。狂言はそれを踏まえていると言える。さらに、中世絵画の中に、複数の鳥が梟を襲う擬攻(モビング)の様子が描かれているものを指摘し得る。海外の美術館に所蔵されているもののためか、あまり注意されてこなかったが、メトロポリタン美術館蔵「書画押絵貼屏風」は団扇形に縁取られた画面に描かれた花鳥図と色紙形の書を屏風の各扇の上下に十二組ずつ貼り付けた六曲一双の屏風で、室町時代(十六世紀)の作とされている。この中の一枚に、まさに、一羽の梟に対して六羽の鳥が鳴き立てている様子が描かれているのである。このように梟と鳥の敵対関係は、文学、絵画の諸分野において取り上げられ、人々によく浸透していたことがわかる。狂言《梟》における「鳥」の印は、観客にとって納得のできるものであり、巧妙に選ばれたものだったと言えるのである。この研究成果については、論文「山伏狂言の印—茄子・鳥・蓀—」(『藝能史研究』、第182号、1頁—15頁、2009年)にまとめた。

二年目は、中世後期の室町小歌を対象として、特に「花筏」「花車」「花鞆」など「花」+器物という成り立ちを持つ言葉について、意匠・文様との関わりを考察した。美術史においても、そのような意匠・文様の文学的背景について触れられることはあったが、そもそもの用例の解釈が誤っていることも多かった。本研究では、小歌がある意匠・文様の成立に深く関わっている場合、あるいは逆に、小歌に含まれる一語が、意匠・文様の世界と響き合っただけで豊かなイメージを獲得している場合、小歌の解釈と絵画の解釈が連動する場合などの具体的事例を指摘した。たとえば、『閑吟集』小歌に見える「花筏」という言葉は、桜の花びらが水面に落ちて固まり、筏のように見えることを譬えた語とする解釈と、

筏に桜の花の枝が挿してある、または筏に桜の花びらが散りかかっている状態を指す語とする解釈の二様があった。「花筏」という語が文献に見えるのは室町時代まで下り、和歌においてはわずかに三例ほどが見られるだけである。言葉の流布という面では、流行歌謡である『閑吟集』小歌は大きな影響を及ぼしたと思われるが、この一首は「吉野川の花筏 浮かれて漕がれ候よの 浮かれて漕がれ候よの」というもので、「浮かれて漕がれる」という実態が「焦がれる」との掛詞からしても重要である。従って、「花筏」は、桜の花びらが水面に落ちて固まり、筏のように見えることを譬えたのではなく、実際に木で組んだ筏と桜の花の組み合わせと見るのが妥当であろう。一方で、安土桃山時代には「花筏」文様が流行した。高台寺の蔭絵須弥壇が著名な作例であるが、この文様の成立には、『閑吟集』小歌が関わっているものと思われる、また逆に、この文様の流行によって、当該小歌を聴く人は、すぐにこの文様を思い浮かべる、といった相互関係が想定できるのである。同様のことは「花車」の語についても言い得る。『宗安小歌集』には、「五条わたりを車が通る 誰そと夕顔の花車」の一首がある。当該小歌は、『源氏物語』を典拠とし、夕顔と光源氏の出会いの場面を取り上げている。「花車」の語は美しく飾られた車を彷彿とさせ、きらびやかな美の世界の構築に効果的に働いていると思われるが、いかにも王朝風の雅な語と見える「花車」は、平安朝の用例を見出すことができない。和歌にはほとんど詠まれていない言葉であるが、室町時代に下って謡曲の中に用例が散見する。しかも、王朝時代を描く能の中に「花車」の語が多く用いられ、さらにその能には花で飾られた車の作り物が出る人が多いのである。平安時代の文学作品に例を見ない「花車」は、能の作者や享受者にとっては王朝の雅を内包した言葉であり、作り物によってその視覚的な美しさが強調されていった。一方で、桃山時代からにわかに流行した「花車」の意匠がある。この文様の生み出されてくる背景には、室町期に花が生活の中に密接に入り込んできたことがあげられるが、こうした意匠の視覚的な美しさを、当該小歌は最大限に利用したものであると思われる。そして当代の流行文様を取り込むことによって、源氏物語の世界に当世風を付加したのである。この研究成果については、「室町小歌と意匠・文様の世界」と題して口頭発表し(日本歌謡学会、2009年6月6日、玉川大学)、同題で論文にまとめた(『日本歌謡研究』、第49号、9頁—20頁、2009年)。

絵画の動物表現と中世芸能の関わりとしては、特に鼯に注目して調査を行った。『梁塵秘抄』には、鼯が笛を吹くと表現した童謡

風の一首が収められているが、『鳥獣人物戯画』の模本には、まさに笛を吹く鶺鴒が描かれている。今まで指摘されていなかったが、歌謡と絵画に共通する発想として注意される。『鳥獣人物戯画』を見直すと、これまで子狐とされてきた数匹の動物が鶺鴒であると確認でき、これらはいずれも、手を胸より上にあげた姿で描かれている。文学作品の中で「鶺鴒の目陰」と表現される、目の上に手を翳すような動作が絵画化されている場面もあり、そのような姿から笛を吹く鶺鴒の姿も自然に連想されたものと思われる。動物の習性のどのような点に注目するかについても、絵画と歌謡の共通性が指摘できるのである。この研究成果については、図書『梁塵秘抄の世界—中世を映す歌謡』（角川学芸出版、285頁、2009年）の第三章にまとめた。

最終年度は、絵画の動物表現と中世芸能の関わりとして、燕に注目して調査を行った。

平安後期の『梁塵秘抄』には、さわがしく、また、恋する鳥としての「燕」が登場している。「西の京行けば 雀 燕 筒鳥や さこそ聞け 色好みの方かる世なれば 人は響むとも鷹だに響まずは」は、「西の京ではうるさく鳴き立てる鳥たちがいると聞く。色好みの多い世の中であるから、人は騒ぐだろうが、私さえ騒がなかったらよいではないか」と、旅先で遊女の誘いに乗ったりはしないと妻あるいは恋人へ言い訳しているような趣の歌と捉えることができる。当該今様においては、「燕」は「雀」や「筒鳥」と並んで、遊女の譬えとなっているのである。このような把握は同時代の説話に見られる、夫婦の情愛の深い鳥としての燕認識と関わるものと思われる。一方、室町後期の『閑吟集』には、「人は嘘にて暮らす世に なんぞよ 燕子が実相を談じ顔なる」とあって、仏教的な趣を持った鳥として燕が登場する。このような燕の性格について、従来、五山文学との関わりが指摘されてきたが、同時代の絵画とその画賛に目を向けると、仏教者が、悟りの境地を燕の自由な飛翔の様に重ねている例が見いだされた。田村方南によって紹介された、一休の燕絵の自賛の一節には「燕子風流欺富貴」とあり、自在に飛び回る燕にたくして一休自身の人生を詠んだものと受け取られるのである。燕を仏心の鳥と見るのは室町期以外にほとんど例のない把握であるが、歌謡と絵画に共通する発想として注意される。なお、絵画において燕は柳や波と取り合わされることが多く、そのような組み合わせの背景には、一般的に和歌が存在するのであるが（梅と鶯、紅葉と鹿など）、燕の場合は例外的で、和歌とはあまり関わらずに、絵画が独自に組み合わせの素材を取り上げて展開していくことが確認できた。また、小歌に近い芸能

である能の中には、親子の情愛の深い鳥としての燕が登場する。これは『梁塵秘抄』や同時代の説話に見える夫婦の情愛の深い鳥という把握から分化してきたものと思われ、同様の分化は雉についても起こっている。この研究成果については、「中世歌謡の燕—情愛の鳥・仏心の鳥・吉祥の鳥」と題した論文にまとめた（磯水絵・福島和夫・植木朝子他『磯水絵先生還暦記念論文集』和泉書院、印刷中）。

さらに三年間にわたる研究の成果を取り込んだ『コレクション 日本歌人選 今様』（笠間書院 2011年8月刊行予定）の原稿を完成させた。本書では『梁塵秘抄』今様と絵画の関わりを個別の歌謡に即して論じている。

歌謡と絵画・意匠との関わりについては、まとまった先行研究がほとんどないため、本研究はそのテーマを追求するいくつかの手がかりを提示したという点で、一定の意義を持つものと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①宇津木言行・鈴木治子・菅野扶美・植木朝子・伊藤高広・馬場光子・「梁塵秘抄注釈（第四回）」（『梁塵 研究と資料』、執筆者相互の査読有、第26号、104頁—135頁の全編にわたり六分の一担当、2009年）
- ②植木朝子「今様起源譚の展開—中世聖徳太子伝から—」（『同志社国文学』、査読有、第70号、36頁—45頁、2009年）
- ③植木朝子「山伏狂言の印—茄子・鳥・露—」（『藝能史研究』、査読有、第182号、1頁—15頁、2009年）
- ④植木朝子「室町小歌と意匠・文様の世界」（『日本歌謡研究』、査読有、第49号、9頁—20頁、2009年）

〔学会発表〕（計1件）

- ①植木朝子「室町小歌と意匠・文様の世界」日本歌謡学会、2009年6月6日、玉川大学

〔図書〕（計4件）

- ①磯水絵・福島和夫・植木朝子他『磯水絵先生還暦記念論文集』和泉書院、刊行確定、2011年
- ②江藤茂博・山口直孝・浜田知明・植木朝子他『横溝正史研究』戎光祥出版、144頁—153頁、2010年
- ③植木朝子『梁塵秘抄の世界—中世を映す歌謡』角川学芸出版、285頁、2009年
- ④植木朝子『梁塵秘抄』角川学芸出版、186頁、2009年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植木 朝子 (UEKI TOMOKO)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：10272741

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし